

信州大学創立 60 周年記念文理学部同窓会参画事業

音楽ドキュメント映画「ララ歌は流れる中山晋平物語鑑賞と晋平曲の合唱」

文理独文 14 回 高根 恒子

総会後は経済学部第一講義室において映画鑑賞会がおこなわれた。一般市民も含めて 120 人ほどが楽しんだ。ここでこの映画の内容を紹介してみたいが、もし勘違いや誤解があればお許し願いたい。

「ララ歌は流れる中山晋平物語」のタイトルが示すようにこの映画の中には晋平の作曲歌が 21 曲も流れている。松井須磨子に扮するソプラノ歌手の「カチューシャの唄」「ゴンドラの唄」あり、子供の歌手の「肩たたき」「シャボン玉」あり、大人の合唱「旅人の歌」あり、山下洋輔のジャズピアノあり、演歌師の「バイオリンとカチューシャの唄」等多彩である。彼が一生の間で作った曲は三千曲とも言われている。晋平は長野県中野に明治 20 年（1887 年）に生まれた。村長であった父は 45 歳で死亡しその時彼は 6 歳であった。母「ぞう」の支えもあって苦勞の末代用教員になった。しかしそれに飽きたらず東京で島村抱月の書生をしながら東京音楽学校を卒業した。抱月の依頼でトルストイ原作の「復活」の劇中歌として大正 3 年（1914 年）27 歳のときに「カチューシャの唄」を作曲した。これは日本古来の俗謡とドイツリートの中のメロディーを目指しているそうだ。これは須磨子自身の歌声をレコードで聞かせていて貴重である。これは竹久夢二が楽譜の表紙絵を描いたことと演歌師によって全国にひろまった。「神に願いをララかけましょか」の「ララ」は彼自身が故郷の村祭りでなじみ深い舞い・式三番叟から思いついた囃子言葉であり、曲を引き締めているという。明治政府文部省音楽取調掛長伊澤修二たちの方針により古今和歌集出典の格調高い小学唱歌が国文学者により作詞されていた時代からすでに 30 年経っているとはいえ、このような砕けた感じの「ララ」が使われたことはさぞかし新鮮な驚きを民衆に与えたのではないだろうかと思う。大正 8 年から始まった童謡運動にも参加し、今までの型にはまったものではなく、子供の目線に沿った本当に歌いたくなるような曲作りを目指していった。池田町出身の浅原鏡村作詞の「てるてる坊主」は晋平が童唄のメロディーを元にして、転調を少なくし、低すぎる音を直して歌いやすいように工夫して大正 10 年（1921 年）に作曲したものである。これはイタリアの国際コンテストの優秀曲に選ばれている。野口雨情作詞の「証城寺の狸囃子」は振りがついて子供が楽しげに踊っている。戦後始まったラジオ英会話のテーマ曲「カ

ムカムエブリボディ」としてもおなじみである。ジャズピアニストの山下洋輔氏はこう絶賛している。「砂山」を初めとして「あの町この町」「シャボン玉」「雨降りお月」などの晋平メロディーはすばらしい。日本音階だけでなくそれに独特の節回しがあり、掘り起こしても尽きない大きな何かが埋め込まれている」と。又晋平は地方の民謡作りにも励んだ。端唄を元にしてまず「須坂小唄」が生まれた。「東京音頭」は今やヤクルトスワローズの応援歌となっている。「越後十日町小唄」は映画の中では市丸が歌っているが私にとっても越後出身の友人がよく唄ってくれた懐かしい民謡である。晋平の民謡には「野沢小唄」の「ユラユラユラリは湯のけむり、チャラチャラチャラリは水の音」のように作詞者と組んで、ふんだんに囃子言葉を入れているのが特徴のようである。彼は民謡作りの依頼が入ると必ず現地を見に行ったという。

又軍国主義の嵐のなか軍歌指名作曲家となったが軍人は嫌いだと言っていた。1944年には工場より依頼された曲も含めてたった3曲しか作らなかったし1945年には一曲も作らなかったという。1945年の東京大空襲のなか義父晋平の手を引いて逃げた思い出を長男卯郎の妻中山富子がユーモアを交えて語っている。

「大衆の口ずさむ調べと共に私は生きる」と晋平が述べているように彼の目指す芸術の方向ははっきりしていた。①大衆に受け入れられる芸術②皆が口ずさめる親しみやすい歌作り③日本人に長年支持されてきた伝統芸能の上に西洋芸術を取り入れる。等が師島村抱月からの教えであり彼はそれを守って極めてきた。それ故後に続く者も多いという。時代のふるいにかけてもなお歌い続けられている晋平の曲が多いのはこういう理由によるものだったのだろう。この映画の副題「音楽ドキュメント」が示すように資料に基づいて晋平の生涯は順を追って描かれている。誇張や押し付けが無く抑えた表現のなかに含蓄があり、見ていてさわやかである。野口清人監督は文理学部独文科で私には先輩にあたる方なのだが、お人柄がそのまま映画に反映している気がして嬉しくなる。映画の最後に流れる吉井勇作詞の「ゴンドラの歌」は大正4年（1915年）28歳時に抱月より依頼されて作曲したツルゲーネフ原作「その前夜」の劇中歌である。これは母危篤の知らせを受けて中野へ急ぐ汽車の中で作曲したものだそう。晩年晋平は映画館で黒澤明監督の「生きる」を見た。ハイライトシーンで志村喬ふんする主人公が「ゴンドラの歌」を歌うのを聴いた。映画の主人公に死期が迫っていたのと同じように、その28日後彼はすい臓炎のため死

去した。享年65歳であった。「命短し恋せよ乙女」と澄んだソプラノが朗々と流れてこの晋平映画は終わっている。特別出演の歌手島倉千代子のナレーションが映画に花を添え、しみじみした温かい雰囲気をかもしている。松井須磨子に扮する歌手が歌っている舞台はわれらが母校重文県の森の講堂だろうか。全編に登場する長野県の風景はみずみずしく透明感がありこの映画をいっそう魅力的にしている。こんなすばらしい映画を作ってくれた野口清人先輩に乾杯。鑑賞後の観客の反応はアンケートにも現れているように好意的なものばかりであった。休憩後音研OBと賛助4人の16人で10分間晋平の曲の合唱をした。指揮は佐久隆明氏、ピアノは大倉孝子氏、曲目は音研OBの「砂山」「ゴンドラの唄」、会場全体の「背くらべ」「雨降りお月」である。「砂山」はたった2日の練習では不十分だったということもあり四部合唱が八部合唱に聞こえたのではないかと恐縮している。「ゴンドラの歌」は斉唱ということもあり朗々と気持ちよく歌うことができた。会場全体の歌もスクリーンに歌詞が出て懐かしい気持ちでみなさんが歌ってくれた。翌々日の6月7日付市民タイムスには合唱の写真を載せて頂いたし、賛助の佐藤進氏がイベントの様子を7月3日付市民タイムスのコラム欄で紹介して下さいという嬉しいおまけもついた。その後は中野和朗元松本大学学長の人物紹介と野口清人監督の「映画作りの苦労話」が続く。以上。